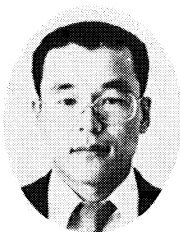


三年目の反省



渡部 岩男

この四月、初めて転任というものを経験した。離任式のときは、「ちよつとカッコイイあいさつを……」と考えて壇に上がったのだが、考えていたことは何一ついえず、思わず口から出た言葉はたつたふたことであつた。

「いろいろお世話になりました。さようなら。」

それも小さい声でボンボンといえたきりで、およそカッコイイというものにはほど遠いものであつた。

だが、今にして思えば、なんと自分の気持ちにピッタリ合つた言葉だつたのだらうと考えるのである。

新任で右も左もわからないぼくを、「先生、先生」とうまくほめながら、教師のいろはを教えてくれたのは、ま

さに彼らにほかならない。彼らからいわせれば、「なんと手のかかる先生だろう」という事になるにちがいないと思われるからである。

ただ、「若い」というだけで、子供たちは喜んで接してくれたように思われる。しかし、そういう子供の姿に、ぼくは甘えてしまつていたのでないだろうか。「若い」ということは活用すべきだが、それもあと二、三年もたてば色あせてくるにちがいない。

「若いから」ということで、先輩からは大目に見てもらい、父兄にも少々のことには目をつぶっていただき、子供たちからも許してもらい、自分はいつたいどれだけ子供たちを許したことがあるだらうかと考えると自己嫌悪に

陥らざるを得ない。

宿題を忘れたといつてはしかり、静かに話を聞かないといつてはしかり、まるでわざと意地悪く、子供の欠点ばかり見つけようとしていたように思われてきて、自分がいやになつてくることがある。

新任で教壇に立つて間もない日、子供たちがいつこうにいうことを聞いてくれないので、教壇の上に寝ころがつたことがある。

最初子供たちは不思議に思い、困惑し、最後に怒つてきた。

口論になつた。

「なんで先生は、あんなことをしたんだ。」

「やりたいからやつたんだ。」

「それでは理由にならないと思いません。」

「それじゃいいうが、みんなだつてやりたいことをやつていたじゃないか。みんながやりたいことをやつていたのでは世の中どうにもならないと思う。」

戦いは、一見ぼくの勝利のように思われたが、この事件によつてぼくはたいへん反省させられた。というのは、この事件と全く逆の立場で、いつも、子供をしかるたびに、ぼくは子供たちに同じようなことを問われていたのではないかということである。

子供たちがぼくを批判したように、ぼくが子供たちを批判するとき、子供たちはぼくに向かつて、

「私たちも、実は先生にそれをいいたかつたんですよ。」

ということを知つていたように思われるのである。

子供たちをこのように変えたい。こうならないかなあ、どうしてこうならないんだらう、全然いうことを聞かないなあ……、とつい考えて、しかつてしまつたあとで、子供たちのこんな言葉が聞こえてきそうな気がするのである。

「人間が性格や態度を変えようとするには、たいへんな努力が必要なんですよ。自分は全然変わろうと努力せず私たちだけを変えようとするのは無理な話じゃないですか。」と。

(松枝岐村立松枝岐小学校教諭)



子供の成長のために